

中 登 城中出仕候様申遣し候由 今日夕刻 前様御前へ出 和議の御嘆息 當公 御論を伺御英氣御養感佩是夜御床几中へ焼芋百疋申遣す、荒井甚之允へ久世を以案内

四日 御登 城 兩度惣閣老へ御逢閣老之内別上田侯御應對御論判上田侯尤和議を主とし候由 林大學井戸對州へも御逢何れも和議 御退散遅く夜五ツ時 歸御直臣戸田大夫一同奉侍四時退出 但 當公御一同に奉伺 廟議いよゝ不振 朝出仕夜五半退散

五日 太公御風氣と被 仰立 御登 城御延引 是日石川和介兩度來り密議 是夜阿閣を呈書御不快御押被 遊候も明六日 御登 城に相成候様林大學頭井戸對馬守兩人今日發足筈候處差留置候旨申上候 荒井甚之允へ罷越五ツ時迄對談

六日 朝出仕 夕出仕 今日五半御供揃にて 太公 御登 城八ツ時過 御退散通信通商之儀は決る御許容無之と閣老決議之段申上林井戸へも

其旨廻達に相成候由 太公御快然可知石和へ一書を贈り昨日の丹精を稱福田八郎右衛門來る

七日 石和來る一寸會談林井戸も此上交易之儀は口外仕間敷旨御請申上候よし津田山三郎鮫島正助來る 昨夜華木來る黒川へ委曲に傳言す 今日御馬被下に成河原毛也 鴨志田來り 命を傳 土屋侯へ御書案呈す

八日 雨 出仕 是日 幕府を大目付を以諸侯へ 御觸あり 老公 思召過半

九日 晴 石和、鮫島來る一昨日拜領の河原毛馬乘試候事 出仕、金子の呈書呈す、即刻 御書御下げ金子へ下す 是夜華木來玄阿の口氣を聞 十日 晴 出仕 萬一御老中夷人へ應接之節 老公御後見相願候は、御挨拶之儀申上候 是日南部丹州へ 御使

十一日 出仕 昨日神奈川應接之儀 歸御之上伺 異人死人之事 華木

原田八來 信牌之事 墨夷を書翰を呈す二艘歸るへき事
十二日 出仕 今日原八衛門神奈川へ遣す 南丹州參上 大廊下にて
御對談

十三日 晴 六日か今日日々 御登城 出仕

十四日 出仕 昨十三日墨夷を書翰を呈す是は去る十日此方を通信通商
は難及挨拶漂民撫恤と石炭長崎にて被下は相濟可申哉と申遣候答書也
昨日原八歸來金川模様甚惡し

十五日 兩君様出御并表 出御 御目見等々きまり近藤へ内談いたし置

候處昨十四日近藤へ 中納言様へ伺候處忠太夫誠之進何れも詰合之節
は日々の 御目見に罷出候様幸明十五日か出候様 御意に付今日 御
書院三段 御目見罷出候事

十七日 御用捨日に付 御厩へ出三鞍御す 召狀來り出仕 同夕又々被
爲 召出仕 是夜小田又藏來

十八日 雨 出仕 尾州へ 御書定例之通り御參府之御轅の事阿部殿へ御

相談之上也 今日雨天に付應接明十九日に成候よし

十九日 出仕 梅田源二郎來肥長二藩之事 朝小田又來る 伊勢殿并河

内守へ此上格外 御取締之事 御相談

二十日 晴 御厩へ出 直に出仕 昨十九日阿部殿へ 御書出蒸氣船の事

献貢御見合之儀 讃州様へも 御書出 京都より 御歸り先入不爲置

内に交易腹御破之御手段也三段 御目見拜濟 當公 岡田大夫を 召

候多分原嶋の事なるべし 前様か内々 御沙汰有之 是夜島田平原來

り黒川傳言あり

二十一日 晴 出仕 十九日應接之模様林始の申出昨二十日御老中か 前

公へ差上候處伊豆下田を見分之事彼地限にて決斷之儀 前様以之外

御腹立夕刻 御書二通御認伊勢守殿へ夜に入被遣候

但今廿日井戸對州一名にて下田一條石河等へ内文通有之右書は御退

散後阿部殿を御廻し申上候付右書面御返しになる

今廿一日黒川嘉兵衛等下田へ見分に罷出異船二隻は明廿二日同所へ參候よし 昨夜京極筋出火竹下熊田并石和來訪福山藩にても下田一條は

最早馴不及出候ゆへ無是非候間跡の事を屹と所置いたし度との趣

二十三日 原田八兵衛十七日伏枕之事承り愕然

八半比

二十九日 今曉出馬生麥へ異船を縦觀不堪切齒歸途泉岳寺門前にて大砲數聲を聞鎌倉河岸にて又聞 從者哲太郎源三東二郎誠一郎別當中間外に川崎六郎

晦日 是日異船二隻下田より歸る 伊藤八藏等歸宅 是日川路を訪

三月朔日 御登 城なし 四ツ時出仕 三段御目見 御書院

二日 浦賀奉行へ兼お御渡しに相成候魯夷來候は、可差遣書付閣老を廻る 長岡を一書來る 線様を御菓子拜領

三日 魯夷へ墨夷蘭夷を通達の事閣老を御相談右 御存意書草す 御登

城 歸御にて 御神位御記位御拜 兩君御書院 出御三段あり 是日御守殿 御雛拜見 萩信歸宅

四日晴 鮫島正介來る 今日迄日々 御登 城尤廿八日朔日三日はなし

此間日記中絶

三月十一日
公御
老十三日
引同十三日
日尾公御參
府同十八日
御登城御
免御願御差

四月廿五日 阿部伊勢守殿へ中山與津之内御呼出にて興津殿被罷出候間 八郎鷹様を川越にて頻りに相願候間可被遣哉尤 公邊を御世話と申儀

は難整候へ共御支度金位は可被遣との内意 翌廿六日御請書御同人御持參之事

四月晦 今日牧野備前守殿へ能登守殿御呼出尤備前殿芝靈屋へ被相談候 間右退去以前宅へ罷出居候様との事四ツ時過罷越候由 備前守殿へ被相渡候御書付左へ通

前中納言殿御事海岸防禦筋之御用に付去秋以來暫之内御登 城被有之候處最早

御代替御規式等萬端被相濟且尾張殿にも此程御參府被有之候折柄御

隱居之御身にて御登 城被罷在候は御居り合如何可有之哉と深く
 御配慮被成候に付御登 城之儀は 御免被 仰出候様御内願之趣達
 御聽候處一應御尤之御儀去年以來御打續御登 城彼是御煩勞之段は
 御満足に被 思召候一體前中納言殿御登 城被 仰出候義は素々別
 段之御義に而尾張殿御參府等に相拘り候儀には無之候得共異船一條
 も先つ平穩に付前文被 仰立之趣も有之旁是迄の如く日々御登 城
 には不及候併尙御時節之儀御用有之砌は御登 城被成候様にと被
 仰出候

右之趣水戸殿前中納言殿へ可被申上候

九日 河内守左衛門尉參上彪出て接伴す是日山田元吉を訪羽倉□鹽谷と
 同しく土佐侯に謁す

寅正月四日參將はアータムス歟并提督嫡子等八十五人大美□へ參候
 事

此一枚薩州
 の留記書拔
 也

同六日提督始九十九人内九十一人劔付鐵炮を持樂役水主等都合百八
 十五人上陸 三十二人入城 太子田へ年頭の祝詞申聞
 一提督を亞國金銀と夏健へ□島金銀くりかへの儀申聞
 五月十五日 伊勢守殿も奥御右筆竹村を以て明後十七日 前様御登 城
 之儀申上候旨久世十太夫申出 十六日夜尾張公へ御相談
 十七日 御登 城 閣老等依然精神なしとの御嘆息 秋田安房守參上大
 廊下にて出會

十八日 學校試合所之事等御國へ運候様傳五郎へ達す

十九日 丹州父子戸田子淺利氏等示之事 兩公御決著今日運に成候よし

二十日 昨日の晴、輕暑良風止 安井齋新大來

廿二日 訪齋藤劍客 川路を一書來

廿三日 晴 外孫女出生 澤村山寺齋新太
山國寺來

廿四日 雨 出仕明後日 御登 營御延引之事

松阿州を一
 書來る

六月六日 戸田殿執政になる

七日 岡田殿と共に他出

九日 伊達殿參上

十四日 御登 營

廿三日 出仕 川路へ御内使 □□ 望遠鏡之事 學校神社之事 大極

陣之事 外に若林榮助之事 佐藤頼之太之事 慎徳公御木像之事

地震の御物入十萬金之積

廿四日 陰蒸暑 神社孔廟祭式之事 青山會澤へ文通

廿五日 晴暑氣 越前殿へ御返書案以す 安島を以 明日鶴飼へ返書案五月

廿七日 御書付當月十日方著致拜見候 知恩院宮様御内池田大學之拙者方へ一封御轉達慥に致落手候へ共秘啓とのみにて無名の書に有之殊に御別紙之趣にては全く拙者への文通とも不申存候間開封不致 前中納言様へ差出候處全く池内名前にて同人呈書に候は、御開封可被遊候

へ共御開封之上萬一雲上人の書面等御坐候は甚御嫌疑被爲在右書面は相認候仁の御爲に不相成而已ならず謹而 皇國の御爲に不相成不容易事に思召候間何共乍氣之毒封のまゝ御下けに相成申候間右御趣意に御坐候上は勿論野生之取計方無之間即別封貳通進候くれ、もあしからす御推察池内へ宜致言可被下候

七月三日 松延一條呈書

四日 大暑 軍艦蒸氣蘭人持渡候節の事長崎奉行伺書并朝鮮信使大坂へ來を止候儀兩條御付札にて御返しになる 二日三日迄下痢出仕延引

五日 大暑 御登 城 於 御座の間御對顔 御軍制御改正の命を蒙り玉

ふ 七日 御本殿へ出仕 御玄關へ御見送御迎相勤御書院にて 兩公へ相謁

す 九日 以書付致啓達候去る五日 前中納言様御登 城被遊候處於 御坐

の間 御對顔 公邊 御軍制御改正之儀に付 御懇之 御意を被爲蒙
御□□□□には 思召候へ共不容易御大任御心配被遊候右に付は彰
考館御藏書之内 公邊御軍制に拘り候書籍有之候は、御見合にて御追
々爲差登候様被 仰付候間御年寄衆御相談教授頭取中へ御達等宜御取
計之儀

一 御弘道館繪圖爲差登候様 御沙汰に付去月十八日爰元奥御右筆頭取
へ相達先便右繪圖爲差登候間入 高覽候處右圖を餘程小き御本にて
先年頭座へ御下け之上御軍用方へ御預け被遊候様慥に御覺被遊御軍
用方爲御聞に相成候へ共右様之御□□□旨申出候由如何之間違ひに
候哉則御尋に相成候様申聞候儀
一 備前伊勢其外學校の繪圖等教□□□□□に爲差登候様□□□□
右件々何れも御書物爲登一ト通り之儀に候へ共御小姓頭取を運候
は埒明不申候□□を直に各様へ御運申候様只今 御直に被 仰

付候間尙又□□□□之上教授頭取中御達等宜御取計被致度如此

御坐候已上 七月九日

十三日 出仕 御醫師之事伺 當公も御出

十五日陰 出仕 三段御目見 夕南郭并民部君へ罷出

十六日雨、蒸暑 朝阿閣へ御書案を上る 是夜大雨

十七日陰晴不定、冷氣 朝御馬 夕駒邸へ出公子に謁す 是夜大雨

十九日冷氣 慎徳公御 御自拜に付御用捨

廿日 出仕 御豫參之節御拜所之事 兩公御相談 薩侯越侯伊豫侯因州

侯四家の御書の御案文上る 新宇小議 亞墨新話九冊 八五郎を以

献上 御染筆三夫御取計 夕刻戸田氏を訪

廿二日 慎徳公 御法事に付松御殿 御守殿 御機嫌伺候 朝宮崎來る、森文、小田

友來る、萩信來る

廿三日 安中侯を北齋備致五冊 瓦刺弗吐雜記一冊を呈す一昨夕横井 保吉持參

右備攷第一卷六十二枚 第二、六十一枚 第三、四十六枚 第四、四十三枚 第五、三十八枚 但第一卷圖面明細十四五、第五卷にも圖あり惣て美濃紙表紙仕立念入書寫鮮明なり
瓦刺弗杜雜記は薄葉にて紙數貳十五枚、禽獸魚虫人物等圖畫あり但細密にあらず

右二部御報可取計分

廿五日朝陰 南部丹波殿ハ書翰來る使石田隼人納戸勤過日南部殿へ行候

時出會の用人は木下俊藏と云 是日御暇相願興津岡田戸田三大夫等と

石川島御船拜見御臺場をも拜見 主税様内々 御出

廿六日 出仕 御目鏡ニ事一奇

廿七日蒸暑 駒込へ出 櫻任を訪

廿八日蒸暑 御本殿へ出 松御殿へも内廻り

廿九日大暑 出仕 朝興平彌輔來る

閏七月朔 御本殿へ出仕

二日 出仕 山野殿被召 御相伴被命 藤堂殿板倉殿へ御書運阿彌持參

藤堂殿へ松花酒二升白高入 板倉殿へ松花酒貳升なまり一籠鶴氈二枚

箱入被遣

閏月一度も 御登 城なし

八月六日 御登 城

十二日 新詰所へ引移 十一日中奥小僧一人過す

十三日 八郎君江戸見坂へ御移り御家老一段濟又々御側并御用人御小姓

頭迄一同梨花の間にて對劍平伏 是迄は世話に相成候旨 御意 松御

殿御本殿御近習もののみ御玄關へ御送り今日に限り中雀際にて 御乘

輿我々共は猿樂御門にて 御行列拜見の事

十六日 御登 城 竹内下野へ御逢閣老にも御同斷

十八日 竹内下野へ 御丸藥并御歌三首被下候

十八日... 十九日... 二十日... 二十一日... 二十二日... 二十三日... 二十四日... 二十五日... 二十六日... 二十七日... 二十八日... 二十九日... 三十日...

乙卯日曆 安政二年 自正月廿二日至三月廿二日

正月元日朝晴晝陰夕晴天氣靜也 布衣著用挑燈にて出仕 侍貳人麻上下
草履取箱持夜中ゆへ草り取にて挑灯持兼る實は長柄爲持 御本殿へ出仕 夜
明後 御箱出候付近藤伊藤一同御用人 年寄部屋へ謁候 上御坐の間
北御入側へ列坐朔望等には北向に列坐之處今日は御年男所作有 其時 君公表御
座の間へ 御出御年男御式相勤御庭には御鷹方御鷹据罷在 君公へ鷹
御一覽畢北御入側 通御其以前北向に列坐罷在 通御濟夫君公
には御書院御庭にて京師御遙拜其内はやはり最初の通畢を御引返し龜の間脱
杉戸外梨花の間前にて 御連枝様當年は 御逢例の通り大廊下通
御並居 御並居 御並居 御並居 御並居 御並居 御並居 御並居 御並居 御並居 御並居
しき板へ扣御送申上候 出御濟年寄衆始一同中歸り

松御殿様にも御遙拜被に遊候御直垂也

乙卯日曆 (安政二年正月)

三百九十八

五半時出仕間もなく 松御殿様御書院 出御之御左右有之一同梨花の間西御入側に在居無程 松御殿様御坐の間に 御出 御年男御加等御式相勤是時御小納戸藤運之左衛門樫村半兵衛 御鏡餅持出 御家老戸田忠太夫 御前へ罷出 中納言様を被進候旨演述右御式相濟近藤等一同御書院西御入側例の詰席へ列坐 松御殿様へ 御簾中様を 御使前木團六奥番頭相勤 御返答被 仰含退去夫を 松御殿様には 御坐の間へ御引返し御近習之族御目見有之由我々共は其御席へ不拘候 中納言様 御城御下りの御左右一橋の御左右追々申來り一同如例御玄關御縁取へ御待受 與一樣御始御近習一同罷出我々は龜の間御杉戶外にて例の通平伏夫を御書院に於て 兩君 御盃事等其外 御式次第書之通相濟

御中入 是時一同午飯

御連枝様 大學頭様御父子并大炊様播州様御不參

御出に候へ共興津能登守 營中を退散遲

く暫之内待合此間に前木團六を沙汰有之能登守退去候は、御家老等一同 御簾中様へ 御目見可被 仰付申間もなく能州退散に付一同奥通にて 奥御殿へ罷出能州殿新太郎殿忠太夫殿三人一同に 御目見畢而入かはり次郎左衛門左一右衛門誠之進三人 御目見畢又左衛門新八御用一人也一同 御目見退去誠之進は途中にて別れ 松御殿へ罷出老女部屋并若年部屋へ年頭申述候 梅御殿老女小川へも次郎左衛門等一同罷出年頭御祝儀申述候 御廣敷御守殿へも例之通り罷出候 兩君御書院出御 御次第書之通夫々相濟一同御後ろを廻り 但御見通し脇を通り不苦旨 御沙汰に付 御上段脇を通り候へ共圍碁の御杉戸を一寸御座の間二の間を通り龜の御杉戸を出候へは御見通しを通り不申候も差支無之事也以後の爲記置候 御書院落間御衝立際に例し通列坐扱能州始順々 御目見當年は 御略式ゆへ 御流頂戴無之名披露にて布衣以上は獨禮也御家老始夫々相濟

乙卯日曆 (安政二年正月)

三百九十九

誠左衛門 番頭 御敷居 内次郎 左衛門 佐一郎 誠之進 奥番頭 迄は 御敷居 外際
御用人を 寄合 差引 迄は 御敷居 を 二疊目 也 兩君 御對面所 出御 物頭を
大番 以上 惣御禮 御襖は 御用人 御小姓 頭役々 御披露は 御禮は 御家老 也 次
郎 左衛門 を 御小姓 頭迄 北御入 側 金屏風 裏に 列坐 けさんを 御目付 列坐
但 御目付も 御目見の 席へ 出候ゆへ 今日 は 席計 明け置
御家老は 南御入 側に 列坐 御番頭を 寄合 差引 迄は 我々 向ふ 通りに 中り 南
側に 列坐 是日 七ツ半 時退去

二日晴 五半時揃 布衣 辨當 不用 荷君様へ 鹽鮭 二尺 松御殿様を 被
進候 間取 計候様 御用人 又 左衛門 へ 文通

兩君 御書院 出御 御讀初 國友 與五郎 吉書 初久 保田 德左衛門 御射初 山崎 傳
四郎 御乗初 加藤 慎三郎

但 御射初 濟候 時我々は 圍基 御杉戸の 御坐敷 へ入 南御障子 を 明け 御板
縁を通り 上る 東之方 御板縁に 列坐 但 御縁側 をは 御小姓頭 を 尻む

くりに 相詰候事

兩君 御對面所 出御 諸事 昨日 之通 御次番 を 御同朋 迄 御目見 被仰
付候事 ○ 肥前 松浦 郡 郷士 山田 直右衛門 來る 一 大事 申上 度よし 家來 之申
聞候には 大船の 事の よしゆへ 鴨志田 傳五郎 へ 相廻候

三日晴 四時地震 頗強し 布衣 以上は 長袴 五半時揃 但 やはり 四時に 成
兩君 御書院 出御 但 元日 を 今日 迄 日々 御神主 様へ 御拜被遊候 御家
老 初例 之通 三段 御目見 但 御年男 調にては 中山 備州 殿 今日 出勤に
付 先づ 備州 一人 残り 外々の 族 三段 御目見 相濟候 上にて 備州 殿 計別段
に 御目見 年頭 御禮 申上 候筈 之處 松御殿 様 中納言 様 御一同 御上段
に 御著坐 前に させし 懸り 御年男 中澤 丈衛門 を 被爲 召備 後守 一人 別段
に 御禮 申上 候儀 如何 敷候 間 やはり 三段 へ させし 出し候 のみにて よろしき
との 上意に 付 去年 之例 之旨 申上 候へ 共 御聞濟 不被爲 在候 付 俄に 丈
衛門 を 中山 殿 始へ 演述 御番頭 へも 打合 三段 のみにて 相濟候事 ○ 被爲

本文命を辱めずと申

召内通りにて 松御殿へ罷出 御小納戸兩人欠跡之事 御國下し人別
 之事等 御沙汰に付年寄共へ申合御請可仕旨申上退去 辨當不用 一
 同は九ツ時拙は 松御殿へ出候ゆへ八ツ時退去
 七ツ時御供揃 出御に付七ツ半とおぼしき比出仕間もなく御箱例之通
 御玄關迄御送申上直に退去 但夜中 歸御之節は近藤出仕之筈ゆへ不
 罷出候御送には近藤之外御用部屋部類不殘出る
 今朝御封書にて 松御殿様を左五郎云々之事 御沙汰に付出仕之上次
 郎左衛門へ申合候處去月廿日過迄に都合兩度吟味候る委細年寄衆へ申
 立候よしに付夕刻被爲 召候節其段申上候事○今夜御謠初殊之外遅く
 夜亥の刻過一橋にて四つよし 歸御
 四日晝小雨今日 老公表 出御無御坐候付 松御殿へ出仕今朝川路左衛
 門尉を使者宮崎又太郎を以 御機嫌奉伺昨三日下田表を無滯歸府仕候
 魯西亞人へ應接之儀行届不申候へ共被 仰付候丈は 命を辱め不申候

上たれと約は御
 追て條に御
 覽の上置の
 官吏を置く
 一事を如何
 せり如や
 る心に

間御安心被遊候旨申上候に付其段申上候事○退散を臺へ廻り西通を御
 舟入御切手廻勤 是夜原任并因州の臣欠マ 來 薩州の鮫島正介外
 一人來
 五日晴晝後大風四方土烟を吹揚蛤山の燒るが如し 松御殿へ出仕早く退
 出午後安井仲平が郷味會へ出席夜分歸宅 足食足兵、の親筆を仲
 平に賜ふ 小笠原侯唐津の臣某に逢北蝦夷の事を問此人去年堀織部に
 從て北蝦夷に行と云是日鹽谷藤森田□吉野及び鹽谷の弟量平同席
 六日晝後大風昨日は弱し 御本殿へ出仕年越の御祝如形相濟 兩君へ
 御目見 御用人人見又左衛門申聞に此度 兩公尊慮を以以來御膳一汁
 一菜に御減し被遊候旨 被仰 出異舶渡來諸國地震等不容易變難に付
 右様被 仰出候よし難有又恐入候御事也 是夕人見山方運元橋之禎等
 來る
 七日晴天氣清和 御本殿へ出仕 御登 城の送迎如例 歸御後於 御書

院 兩君へ 御目見其後讚候御父子并中務大輔様御出に付於 御書院
 御逢に付出坐 但讚候御父子にて一ト切一寸 入御 中務様同斷也
 夕刻駒邸へゆき年頭廻勤 但忍ひ供馬上
 八日は夜雨 出仕 川路より吉野行宮の竹を呈す
 九日 是日大風 出仕 晡時訪藤森淳風 川路へ書を賜ふ御別紙に江川
 の病を唁ひ玉子
 十日晴少々風 御直書三度 土佐の家老福岡宮内來る宮内名は孝茂號南涯
 土佐留守方用人坪内求馬此人へ頼候へは書狀往復便利と云
 十一日 御本殿へ出仕
 十二日 夕刻牧備州を魯夷條納を呈す
 十三日 忍并川越邸へ罷出忍世子は御留守川越侯へ奉謁
 十四日 老公石川島 出御 石川和介來り共に決不可許置蠻夷官吏の事
 を議す 渡邊彌久馬來る

十五日 御本殿へ出仕 阿勢州を不可置官吏の論を呈す 老公よりは今
 朝既に牧備州へ右同様の論御建議
 十六日 老公當年始る御登 營にて川路等再應接の事決す 是夜川越侯
 へ罷出 伊達侯へ邂逅呑海亭にて飽醉
 十七日 石川和介來り共に頃日の事を賀す
 十八日 川路水野筑州岩瀬修理下田行を命せらる 石和を訪ふ 兩君石
 川島 出御
 十九日 老公又同所へ 出御 右三人日數十日にて發足すべき事を命せ
 らる 金十兩久木へ下す
 火繩銃の料なり
 廿日 大雨 出仕 大場武田會澤再勤の事等伺濟
 廿一日 出仕 石川土佐守明日上京に付 御直書御詠歌御品等の御使相
 勤 土州へ始る逢候處邊幅を脩候凡人なり
 廿二日 是日石川島大船無滯津出に相成候旨鈴木藤兵衛等へ申上候面

御下けに成

廿三日朝冷晝晴 幕府監察にて予が外交廣きを甚惡候由可戒可懼 石川和介來る交を狭くいたし候様諷諭 夜 御直書頂戴 上使を以 中納言様へ御鷹之鶴被進候付 出御濟御用捨に候間馬上にて石川島へ相越 大船の浮き候模様一覽八ツ時歸宅吉見左膳來り來月二日伊達殿小梅へ被參候儀打合候

廿四日夕小雨 朝荻信之助、楊進介、武田宗藏來る 御直書三度頂戴出仕八ツ時退去 出仕是夕 御直書持參川路左衛門尉へ罷越七ツ時夜五ツ時過迄談話五ツ半時歸宅例之通酒にて馳走に相成候 魯夷條約之内官吏を置候事 閣老勢州尤正評議之上決る官吏は不可置といふ事に相成 去る十八日川路水野筑州岩瀬修理御目付下田行被 命尤表向は外御用の名目にて内實は右官吏一條を應接仕直し也川路も甚當惑の様子にて 彼是今夕も議論有之候へ共つまり墨夷をおひやかされ候時に至り廟議

變候様にては此度何ほど骨折候もむだに可成との見越のみにて貫き候論一切無之川路實弟井上新右衛門寺社吟味物調役を今日勘定吟味役に轉し下田詰被 命 川越山田辰輔來る明日大船拜見一條也 是日會澤青山へ大船祭神の事 御沙汰之趣申遣す

廿五日大雨 今日川越宇和島二侯石川島大船拜見被致候付御提重被進之儀昨日鴨志田へ申遣す二侯は御老中内意を伺候る相濟御目付へも懸合又松平河内守御勝手懸司 寄大船懸りへも談候處付札にて相濟候由川越し方は御臺場をも御預けに付心得に大船拜見致度との申立のよし伊達の方は不聞定る大船製造被願置候付心得の爲云々なるべし 是日石川和介鈴木秉之丞石川の 同僚添川完平中西忠藏櫻任藏來る分韻詩を賦す 杏花春色雨 聲中の字を分つ 是日金子健四郎稽古開余は客來豚兒は當直ゆへ不得已 大小兩兒を遣し松魚節十本贈る

廿六日雨晴 朝宮崎生川路の御請持參 鮫島正介來る 老公御登 城に

付早朝出仕川路の御請を呈す 當公小梅 出御 高松侯と御兼約の由
以梵鐘造大炮之事 宣命の寫過日阿勢州を呈候處右御末文に邊海無事
の時又復銷兵器鑄鯨鐘之事 成事遂事ながら他日の患也との 御主意
にて□議の事 今日御朱書にて勢州へ御廻しに相成

但今更 宣命を變候様には相成兼候へ共此後邊海無事に成候共備不
虞の三字は萬世不可動候ゆへ其段を一應京師へ被 仰上 幕府を諸
向への解に其譯を何と歟認方可有之との 御趣意備不虞の三字は
勅命中に有之ゆへ也

品川新御臺場前通へ棚をふり候儀御建議右は夷船臺場に近づき候時右
棚にて猶豫之處を打留候 御主意也右棚は水中へふり目印に所々水中
へ出候杭をも打内地の船出入に便にするの御圖面御認被遊候

廿七日晴 伊達殿招きに付夕刻出馬久しく閑談同席にて酒等被振舞夜九
ツ時歸宅

廿八日 出仕 のしめ麻上下 四月朔日と正月廿八日は
布衣以上のしめなり 今朝 上使を以前様

へ御鷹の鶴被進候夕刻岡太夫を訪鴨志田石河同席

廿九日大風 當公 上野 御豫參 是夜本所出火回向院燒失

二月朔 陰晴不定 御本殿へ出仕 年寄衆部屋にて帆前雛形等一覽萩信

之助の記憶等感するにあまりあり 余一樣御弘めに付 御次御廣式御

守殿へ御祝儀申上候 松御殿を被 召兩度罷出候 關白様御書拜見御

琵琶 天覽に入 御満足之儀なり外に萬里小路家をおしうへの文通同

斷近來 御所御ふしん果敢取候旨悦ひの書なり

二日晝過陰 老公小梅 出御伊達殿參上に付彪御先番に罷出終日御饗應

の御席へ侍坐菊池爲三郎長々流浪中遠州殿を内々合力を受候付此度右

御報として水府製卵の花緘の御著長 老公御秘
藏之分 於小梅伊達殿へ御贈尙又

當公を南都馬一疋被進候兩様之御禮遠州殿懇に被申上候付入 御聽

六日 老公御登 城川路水野岩瀬三人近々下田へ出張に付御逢畢閣老

へ御逢梵鐘并松前上ヶ地の書類御持參候相成候事

七日風雨 竹下清右衛門并川井田市郎左衛門來る竹下明日發し水戸へ下よし 安井鹽谷吉野三子來終日談論

八日 岡田氏を訪

九日晴 添川廉齋を訪羽倉石和に邂逅 御厩にて甲冑あてもの

十二日 甲冑御目見之儀雨天に付御延引今夜四ツ時迄に晴候は、明日可被 仰付旨

十三日 今朝快晴候へ共昨夜四ツ時迄雨天に付又御延引來る廿一日と被 仰出 但今日も八半過雷雨 父子一同王子へ乘廻し□屋へ立寄歸路酒 井五左を訪

十五日晴 戸太夫等一同傳通院邊逍遙

十六日 太公御登城鎌倉遠馬之事閣老を御慥憑申上候 十六日御城書

寺社奉行 大目付 町奉行 御勘定奉行 御目付 御勘定吟味役

覺

來月中旬比老中若年寄中鎌倉遠馬願濟之上相越候儀も可有之哉今般は格別遠路之儀名指し同伴致候も迷惑之向も有之は如何に付其節萬一同伴被致度左之面々は此節を追々名前可被申聞候尤手重之儀無之質素手輕に相越候筈候事

十九日 今日御馬廻頭上坐御側御用人再勤御役料物成五十石御増豚兒建 二郎中奥御小姓被 仰付御切符等並之通賜候 是日 御殿向御禮仕舞 牛門始廻勤是夜坊主共來

廿一日晴 甲冑 御目見畢手馬有之族乘馬其後三役并中奥部類御同朋 迄乘馬被 仰付何も甲冑 朝五ツ揃四半位 御目見始り八ツ過濟御馬 場相濟七半歸宅 今朝石川和介來り幕府監察にて川路并余か事探索の 沙汰を傳ふ世途艱險山海不啻噫 巳年二月廿一日風雨を冒し小梅の官 舎へ移りし事を憶ひ感慨

廿二日晴 馬に跨豚兒建二家來源三東二東之進誠七誠三を携木母寺に至る櫻花輝□遊人絡驛滿目悉皆酒肉之池歌唄之海嗚呼 奥平謙輔來

廿三日晴 石河櫻等來る 登 城

廿四日晴 御用捨 大和近臣 荒尾來る槍術の談あり此人寶藏院流を修業せしよし南部二代め々出たる流にて二間の十字槍を用ゆと云ふ日向邊に同流ありと云其説を聞に中段に構面をつき候を面は危きゆへ先つ肩の邊を突候よしかた槍術の體のよきもの歟 能登守殿日向七萬石の改革を被頼たるが五左元來水府の人ゆへ水府の故事等を以重をなし度口氣なり内藤家借財殆百萬のよし愚亦甚 是夜深更京橋邊失火曉迄延燒 廿四日御城書

覺

鎌倉遠馬之節老中若年寄中伊達羽織伊賀袴着用之事 但乘供は常の割羽織伊賀袴着用之事

一 同道之面々も伊達羽織着用之事
一 諸役人之内鎌倉迄は遠馬被 致兼候面々とも有之候は、爲迎神
奈川程ヶ谷邊迄被相越候も不苦候
右は去る廿日阿部伊勢守書付渡候由

遠馬之節笠之覺

表白、裏金老中若年寄 表白、裏銀御側衆 表白、裏黒諸御役人 表赤

奥向 右之通相極候よし御坐候

廿六日晴大風 府中へ遠馬小金井の花十の六七前花

廿七日 老公御登 城に付 出仕

廿八日 松平由之助殿被 召候付相馬并御相伴被 仰付

三月朔 佐藤民之助を訪朝川晋四郎へも見舞

二日 今曉八ツ時小網町へ出火淺草御門燒失天王櫻にて鎮火

三日晴 御本殿へ出仕 御見送御出迎三段謁見如例 御守殿御雛拜見

十一日陰 明六ツ時御供揃にて 老公神奈川御遠馬被 他出御箱廻候て
馬上御供之面々御先へ切手御門を出御門外にて乗馬のまゝ 出御を奉
待御門外へ御行列へ相立候馬上御供左之通

御打物之跡へ南無阿彌
御馬乗御同朋

御近習貳人

歩行御供の頭取等
御近習六人

御醫師

御目付

善衛門

銀次郎
御使番

新太郎
大御供

御行列跡山田嘉市郎人見又左衛門近藤次郎左衛門藤田誠之進鈴木式部
下馬乗 大御供も供方差略ゆへ我々も差略片口兩侍鍵床几持物持のみ
召連候事

一上御始め馬上御供は一同さいみ單羽織黒紋付差袴着用

一鈴木式部は私用逗留中 思召にて 召候事

一出御品川東海寺迄は平常御行列へ馬上御供御召連被遊候ゆへ御地道
にて被爲入候事 但 歸御之節も東海寺へ御屋形迄御同斷

一朝五半時過東海寺へ御入込少々御休息被遊馬上御供宣旨御左右申上

但東海寺御
小休へ兼
御城付方
社奉行へ
御奉行爲
候御達に
相成

夫々 御召切馬上の槍のみ御供仕候事

一六郷渡場 潜龍公 御召船へは御近習并御醫師御使番御目付御同船
仕候事

一新太郎始布衣以上御供之族御別之船に而 御召船跡を相渡候處新太
郎へ存外天氣も宜 御満足之旨 御意尙又鈴木式部へ始り逢候乍旅
支度も早く出來感心と 御意新太郎御取合申上候

一川崎本陣惣左衛門と申候方へ一寸御立寄無程又々 御召切にて

一正九ツ時神奈川本陣源右衛門と申者方へ御入込之處庭前より南へ當
り高みの場所御覽被遊何山に候哉御尋之處右は神奈川の景色見晴し
候場所の由申上候付直様御歩行にて右場所へ被爲成候切石至て峻く
芝愛宕同様之場所に有之御上坂之上暫之内景色御詠め御茶道罷在候
ゆへ御煎茶等被 召上又々源右衛門宅へ御引返し御腰付御辨當被召
上御給仕等御先番に相詰候御小姓頭取大場大二郎御小姓淺沼四郎八

郎御小納戸清水久三郎役々 但川崎神奈川兩本陣御小休之儀は御城付
勘定奉行へ相達御代官の達に相成候

一六郷渡場并神奈川宿へは御馬乘共兼る相詰居御馬渡方并飼葉等取扱
候事

一御道筋驛々兼る御代官の達相廻居候哉御馬口水并人足等手當有之候
一九ッ半時過神奈川御立八半時過東海寺へ御通り拔に相成候處直に御
行列相殘七ッ半時小石川御屋形へ 歸御被遊候事

十二日 太公 御馬御引上げ被爲召候鈴木石州來る

十五日 鈴木式部來 明日御登 城は御延引明後十七日御登城候様奥

右筆申出候由十太夫申出

十六日 岡田大夫太田誠一同王子行

十七日 訪鈴木石州 御疝癢に付御登 城御延引 御遠馬閣老衆無御構

御出候様十太夫を以爲御達候處追る御手限にて御越候様尙又被 仰出
候事

十九日 登 殿今日天氣合に付閣老等遠馬延引

廿二日 登 殿御本殿へ一寸罷出質素達之事 御意を傳

礫邸蟄居中貫物之覺

(自弘化元年五月二日至同二年三月二日)

天保十五年甲辰五月

固窮迂人

- | | | | |
|---------------------------|--------------------------|-----------|----------|
| 一酒壹升 | 玉葛三つ遺す | 一御藥 意味あり | 一鈴木精より |
| 一重 <small>なすの</small> とう煮 | 岡本平 | 一あわび | 村越芳 |
| 一直酒壹升 | 川邊平 | 一ごもくすし | 野田又 |
| 一酒壹升五合計 | 一 <small>大關元</small> 柴田鈴 | 一菘肴 | 玉子すじき精 二 |
| 一肥前焼土ひん一つ | 親康松 | 一梅漬 | 同断 |
| 一茶箱入 | 玉子遺す | 一にしめ二重 | 千魚富永六 イ |
| 一麥めし并菘染 | 林清 | 一麥めし | さばすじき精 ㊦ |
| 一菘豆 | さば江幡甚 | 一すし | あじひもの杉山千 |
| 一あわびふくら菘 | 玉子一 | 一竹の子菘しめ二重 | 玉子浅利六 |
| 一すし | 千さば | | |
| | 一 小柳津太郎 | | |

礫邸蟄居中貫物之覺 (弘化元年五月)

一すし	玉子	久世十	一かしはもち一重	すじき精	三
一煮肴	一さば	小松崎	一いわし一皿三十計	野田又	二
一いり豆ふ	江幡甚	江幡甚 乾ノ二	一あわび貳ツ	村越良	
一すし	楊 玄		一しじみ汁一なべ	白ごま少々	
一煮肴	岡じま藤		一ごま汁なす一なべ	すじき精	四
一たばこ二ツ	干さば	橋本甚	一香の物等二重	野田又	三
一酒一升	川邊平	二	一同断一重	三大關元	
一うなぎ貳百文計	増子丑	干魚	一らつきよすづけ	二小柳津	
一煮豆一重	相田盛	一	一ぼたもち	林 清	ろ
一うなぎ貳朱文計	嘉兵衛	さば	一あさり一皿	野田又	四
一煮肴	西野新	さば	一にしめ一重	すいき敷	
一酒一升	浅利六	玉子	一香のもの	野田敷	
一やき豆ふ	江ばた甚	免	一煮付肴	取次のもの失念	
			一つまみもの	玉葛	
				玉子九つ入	
				人見又	

一かつほさしみ一皿	江幡甚	離	一千さば御國	茶少々遣す	桑原を爲登
一白砂糖	浅利六		一玉子三十同	山口を爲登	
一酒一樽	増子丑	是は石碑の禮	一うなぎ	干魚遣す	鴨志田傳
一香のもの	西野新	心なるべし	一くわし一箱	久保田林	一
一香之もの	入谷新		一あゆ煮付	鴨志田傳	
一煮肴こち	楊 玄		一玉子一箱	大久保要	
一てんぷら	江幡甚	震	一桃	矢野唯	
一香のもの	帆原や吉右衛門		一のけり	五平次	
一酒五合斗	岡田先生		一酒一升	喜兵衛	
一うなぎ	豊田又之助	一	六月廿七日	西の新	
一すし箱入	同断	二	一うなぎ一箱	野田又	五
一くわし	同断		同日	岡本平	
一小肴	布施十		一ひやむぎ一井	雲丹入	
一すし	同断		同日	大關元	
一かつほ煮付一重	同断		一煮肴一重		
			同廿八日		
			一香のもの		
			らつきよ		

同廿九日	一里いも煮付	豐田又	三	七日	一ぼろろ	新家半
同晦日	一なきりほしうりもみ	江幡甚	巽	七日	一ひやそうめん	すゞきせい
七月二日	一武將なべ	鴨志田傳		十日	一醬油一升	直酒三 合計入 同斷
六月晦日	一なまりふし二ツ	村越芳		十一日	一うなぎ一箱	保吉右衛門
七月四日	一らつきよすづけ	久米彦		十二日	一うなぎ一重	東國や喜
同日	一さしみ皿	豐田金藏		同日	一うなぎ一重	山方運
同日	一直酒貳升	熱田裕		同日	一玉子三拾	鈴木内匠
同日	一肴煮付一重	淺利徳		一かみなりほし	一酒一壺	富永六
同日	一ふたもの二ツ	林清	は	十三日	一だん子一重	南隣
同日	一そうめん壹箱	齋藤彌九郎		同日	一同斷	北隣
同日	一なまり一ツ	岡本平		十四日	一酒一壺	山方運
同日	一なまり一封	御國		十五日	一半切百枚	町田次介
同日	一同斷	秋山茂		十六日	一劍ひし一壺	大久保要

十八日	一香の物一重	川邊平	三	同日	一なまりぶし四ツ	丹春風
十七日	一しぎやき	北隣	七	廿七日	一酒五合	大金平六
十七日	一なし二拾	淺利六		廿六日	一すし	鴨志田傳
同日	一たばこ	福田八郎		同日	一玉子一箱	北條健
十九日	一らつきよ二器	はし本甚		八月朔日	一氷砂糖一器	小山田外記
十八日	一干もち	宿所		八月二日	一たばこ半玉	ねづみ町
同日	一玉子一箱	山口		同日	一ゑびから煮	鱸
同日	一劍菱五	豐田彦		三日	一酒貳升	郡司孝
廿一日	一すいかわ	林清		四日	一肴物二重	但精進中に付半分餘平九へ ふるまひ殘家來へ遣候事 岡本平
同日	一てすぶら	久世三十郎		五日	一酒貳升	東國やと申來候へ 共保原やならむ 百十五度也
廿三日	一酒壹升	久保田林		九日	一團子	鈴木精
同日	一干餛飩一箱	柴田銓之助		八日	一煮肴一重	豐田又
廿六日	一香の物	西野新治				

一 干瓢 <small>七日</small>	御國々爲登	一 だんご <small>同日</small>	川邊平 <small>四</small>
一 肴酢もの一器 <small>十一日</small>	五大關元	一 同井はまぐり <small>同日</small>	林清 <small>八</small>
一 生姜井もぐさ <small>同日</small>	相さし吉	一 御菓子 意味あり <small>同日</small>	鱸精 <small>十二</small>
一 酒壹升 <small>十二日</small>	いわ崎彌五	一 精進物一重井だんご <small>同日</small>	江幡 <small>坎</small>
一 鹽さば <small>十三日</small>	三小柳津太郎	一 扇 <small>十六日</small>	佐藤氏 <small>外になまりふし二</small>
一 生あゆ <small>同日</small>	野田又	一 かつほこうし付等一樽 <small>十七日</small>	御國より
一 煮豆 <small>同日</small>	入谷新	一 なまりふし三 <small>同日</small>	長島 <small>外</small>
一 かつほ煮付 <small>同日</small>	淺利九	一 鮭少々 <small>十八日</small>	橋甚 <small>外</small>
一 とうなすさつまいも <small>同日</small>	林	一 同少々 <small>廿日</small>	濱野 <small>外</small>
一 酒切手十枚 <small>十四日</small>	石谷市正 <small>ほ</small>	一 鯉麴漬 <small>十八日</small>	岡本平九 <small>外</small>
一 つみ入汁 <small>十三日</small>	鱸精	一 はらゝこ <small>廿一日</small>	布施十 <small>外</small>
一 だんご <small>十五日</small>	同 <small>十</small>	一 らつきよとうがらし <small>廿二日</small>	野田 <small>候は此方遣候うつり也</small>
一 葡萄并梨 <small>同日</small>	淺利六	一 なすからし漬 <small>同日</small>	野田 <small>八</small>

一 ぼら三本同斷 <small>廿三日</small>	鈴木精 <small>十三</small>	一 煮豆一器 <small>三日</small>	江幡甚 <small>良</small>
一 鮭一箱 <small>廿六日</small>	御國 <small>六</small>	一 酒二升切手 <small>五日</small>	淺利六 <small>六</small>
一 同一包 <small>廿四日</small>	吉田又 <small>六</small>	一 かつほさしみ <small>六日</small>	小山田軍 <small>六</small>
一 劍ひし <small>廿四日</small>	東國や <small>七</small>	一 まぐろさしみ <small>七日</small>	西野新 <small>七</small>
一 口なめ二ツ <small>廿四日</small>	相良より <small>八</small>	一 みぞ漬魚 意味あり <small>八日</small>	鈴木精 <small>十五</small>
一 延紙百枚筆二本 <small>廿七日</small>	佐久間貞 <small>九</small>	一 煮しめ一重 <small>九日</small>	同斷 <small>十六</small>
一 あわび <small>廿九日</small>	矢の只 <small>八</small>	一 まぐろさしみ <small>八日</small>	江幡甚 <small>十坤</small>
一 むきめしとろゝらつきよ煮付 <small>晦日</small>	西野新	一 かつほこふじ漬 <small>同日</small>	加治吉 <small>十</small>
一 かつほさしみ一皿 <small>同日</small>	六大關元	一 酒五升切手 <small>十一日</small>	熱田玄 <small>十</small>
一 大ぶ <small>前日</small>	鈴木精 <small>十四</small>	一 酒壹升 <small>同日</small>	松下壽 <small>十</small>
一 九月朔日 煮付 <small>同日</small>	五川邊平 <small>五</small>	一 酒壹升肴もの <small>同日</small>	(中村三五) 爲登 <small>山口</small>
一 さしみ一皿 <small>同日</small>	岡本平 <small>五</small>	一 延紙百枚 <small>同日</small>	飯村藤介 <small>五</small>
一 はらゝこ <small>同日</small>	丹春風 <small>二</small>	一 玉くづ <small>同日</small>	

同日 一わたたしき
同日 一酒壹升
酒五 鎌券
一肴味そづけ一重
同日 一ごもくすし
同日 一だんご一重
同日 一ねぎま一なべ
同日 一だんご
同日 一酒肴
同日 一わたたしき
同日 一だんごいもくり等
同日 一まぐろ
同日 一みそ漬魚

楊 玄
武藤善々
保々權五郎々
送候由不詳
さけみそ 野田又々 九
漬添返す 野田又々 九
みそ漬ま すすき 十七
入谷新
川邊平 六
竹や元々
大わし玄作々
杉山千々
豊田又 五
石川勝

一酒并魚
十五日 一さしみ
十六日 一太白砂糖
同日 一しそのみ
十七日 一しやけ
十九日 一さんま
同日 一むぎめし
同日 一酒一
同日 一すの物二重
同日 一菊花
同日 一いもから
同日 一わさび
同日 一錫盃

齋藤彌
岡本平々
藤田村庄々
御國々爲登
西野新
すすき精 十八
同々 十九
楊 玄
岡本平
御國々
北隣々
齋藤彌九郎
相良六々

廿六日 一羨肴
廿七日 一るび
廿八日 一あじ
廿九日 一酒五
廿九日 一菊花
廿七日 一蠣
廿八日 一兩品
廿八日 一納豆汁
十月二日 一まぐろさしみ一皿
三日 一にうめん井香之もの
同日 一鳥肉等一重
同日 一肴物二重
同日 一うなぎ一重

五平次々
大久保要
鴨志田傳
東國や
楊 玄
江幡甚 乳
佐藤氏
鱸精 二十
江幡甚々 兌
鱸精々 二十一
小松崎々 ○
岡本平々
東國屋

四日 一菊のゆすみそ等
五日 一てんぶら一器
同日 一酒一斤
六日 一牡丹餅一重
同日 一酒一斤
同日 一まぐろどせう
七日 一ふた物一組
六日 一菊花
八日 一酒一壺
十日 一菊み一器
十二日 一きから茶めし汁菊みのつへい
十三日 一あじ大こん煮々
十四日 一菓子一折
同日 一同一袋

林 清
石 勝
林 清
杉山千
江幡甚 □
小山田軍
御國々爲登
林 清
川 邊 七
鱸 二十二
松本三平
周 藏
正 藏

一茶漬	十五日	西野	同日	林	を
一はらゝご	同日	入谷	廿六日	人見	
一蓋物三組煮もの	同日	齋藤	廿五日	杉山	
一さいはいはまぐり	十六日	村越	同日	楊	
一菜漬	十七日	北隣	廿九日	魁	
一初雪	同日	木股	廿八日	梅田栗齋	
一ねきとり	同日	江幡	廿九日	楊玄友	
一たばこ	同日	桑原	一雁肉	川邊	八
一うなぎ料九日御頼にて	十四日分	増子被頼	一菜漬	梅田栗齋	
一納豆汁	廿二日	林清	十一月朔	南隣	十
一菜漬	廿三日	杉山	一酒壹斤	□元	
一重之内 鳥肉	廿四日	大久保	一茶半斤龍川	文淵	
一酒肴	同日	豊田	一酒壹斤	北隣	⑤
			一南一		
			一ねぎま		

一酒一斤香のもの	同日	林清	十三日	かしま又	
一赤飯一重	同日	江幡甚	十四日	同斷	
一香のもの二重	六日	七大關元	十五日	矢野只	
一すし	同日	鴨志田	同日	富水	八
一ふたもの此方遣候	七日	北隣	一ふし井麴漬	入谷	
一いもがら	同日	御國々	同日	はし本	
一猪肉ねぎ	八日	八大關元	一菜漬一桶	帆橋	
一こぶまさ	十日	村こし	一劍三	山口を爲登	
一猪肉	同日	岡本平	鴨みそ	大内藤同斷	
一納豆汁	十一日	北隣	一肉醬一	北隣	廿三
一酒一斤	同日	淺利	一からゑび	井上八郎	
一酒一斤	十二日	江幡	同日	千重	
一酒一斤	同日	楊	一鯛肉	林	か
一なまこ	同日		一ふろふき大根		

廿一日	一あさ漬一重	楊	同日	一まぐろさしみ	豊田金	七
同日	一白魚五度辭	芳卿	同日	一酒一斤并肴一重	まし子丑	
同日	一一斤一種	布施十	二日	一炭壹俵なづけ	武藤善	
廿二日	一まぐろさしみ	江幡甚	二日	一酒一斤	福田半十	
同日	一欸冬花	御國を爲登	二日	一鴨一羽	御國を	
廿四日	一酒一斤并肴	岡本平	四日	一からむくみ煮	江幡甚	坤
同日	一茶一袋	千里	同日	一香のもの	富長六大	仁
廿七日	一首の物并ねぎま	小山田軍	五日	一まぐろさしみ一皿	北隣	〇
同日	一煮付肴一皿	野田又	五日	一猪肉	岡本平	
同日	一玉子二十	御國を爲登	六日	一小魚いも煮付	豊田又八	
廿八日	一鶏肉	村こし	同日	一酒一斤	武藤善(是迄にて 三百度也)	
廿九日	一猪肉	川邊	七日	一鯛	岡本平	
十二月朔日	一けんちん	楊	同日		桑原を爲登	

同日	一とうがらししそ	楊玄	十四日	一小魚并さとい	楫吉	
同日	一菜漬	富永六	十五日	一いかたき	佐藤民之助	
七日分	一たき	土井	同日	一鹽引	ほ口川千藏	
九日	一猪肉	鴨志田	十七日	一わたたき	納豆を大橋玄策	
十日	一鯉わた漬	武藤善	同日	一たまご一箱	御國原君を	
九日	一猪肉瓢酒瓢とも	村こし	同日	一ひらめ	菊永みやげ	
十一日	一酒一斤并まんり	鹿しま井一客	同日	一鹽ひき糍づけ	大内清右衛門を	
同日	一なまこ	村越	一てんぷら	一いはしめざし	石川勝藏	
同日	一氷とうふ等	御國を	十八日	一鶏	岡平九	
同日	一まぐろさしみ	松本三平	同日	一劍ひしからすみ	菊善	
同日	一貳品	小山田軍	十九日	一もち	千葉周	
同日	一鶏卵	菊池を爲登	十八日	一わしこふし漬	大金平	
十三日	一むきみ二品	此方を遣候林清	十九日		楊玄	

同日 一玉子 深澤甚
 廿一日 一酒二斤 東國や
 同日 一酒札井鳥肉 カラスミチ 野田又 十二
 同日 一もち一重 杉山千
 同日 一もち井あさづけ 玉子七林 清 た
 同日 一小鴨井ねぎごぼう 玉七チ 富永六木股が鴨へ求候由
 廿二日 一もち一重 カスツケチ北 隣 廿四
 同日 一酒二斤鹽引一尺 齋藤彌
 同日 一鴨一羽 金子健
 同日 一酒二斤鹽引一尺 齋藤彌

同日 一もち井なまこ 玉子五 西野新
 廿三日 一みかん三十 豊田又 九
 廿四日 一まぐろ 岡本平
 廿六日 一すみ一俵 此方が遣候 移候よし 林 清 れ
 同日 一鴨一羽 江幡へ遣す 御國の人不知 山口が爲登
 同日 一鹽引 宿所より爲登
 同日 一もち 同日 一黒かし二れん内一れん江幡へ遣す 春風が爲登
 同日 一玉子一箱 李七ヲ 橋本甚
 同日 一もち一重 鹽引少々 川邊平 十一
 廿七日 一酒一斤香もの 楫 吉
 廿八日 一酒一斤 同日 一ひしほ一器 小山田外記

晦日 一酒一斤もち一重 久保田林
 廿九日 一酒一斤 豊田又 十
 廿七日分 一香のもの 四小松崎 六八
 晦日 一醬油一升 鹽引北 隣 廿五
 晦日 一雜煮料三重井もち壹重 小山田軍
 元日 乙巳正月

五日 一瓢酒鳥肉 川邊平 十二
 同日 一鳥肉壹臺 林 清 そ
 同日 一半切等 西の新
 六日 一すし一折 菊池永
 同日 一もち一重 久世金
 同日 一酒肴 林 清 つ
 七日 一扇子料 熱田祐庵
 同日 一新海苔井麴漬茄子 千葉周
 同日 一酒一斤井香もの 入谷新
 八日 一すし 福 半
 同日 一たばこ 鹿 又
 九日 一からし漬井にしき繪六枚 小山田軍
 十日 一ねり羊かんなら漬 村こし

駒様を拜領之由にて配分

二日 一煮豆井香之もの 三河屋五平次
 三日 一鳥肉 江 幡 乾
 同日 一もち 楊
 四日 一鴨一羽 菊池爲
 同日 一煮豆 富永六 ト

十二日 一むきめしとろふたもの等

茄子漬北隣 廿六

十三日 一酒五

十四日 一同斷

同日 一もち

同日 一たばこ

十五日 一酒一斤

同日 一同

十六日 一こはめし

十八日 一鹽かま三ツ

十五日分 一すがき

十九日 一まぐろさしみ井ほうぼう

廿日 一たらこんぶ

同日 一麥めしとろ

同日 一淺草のり

廿一日 一忍び鹽から

廿二日 一かもみぞ漬

同日 一あゆすし

廿三日 一酒一斤并香もの五重

同日 一錦繪

廿四日 一からすみ二ツ

廿七日 一いわし漬一桶

廿八日 一酒一斤

廿七日 一もち一重

同日 一ふき一袋

同日 一鹽引

林清 な

東國

入谷新

永小二

袴塚三右衛門

齋藤彌九

楊玄

久米彦

御國

林清

同人

御國

同斷

同廿九日 一酒一瓢 村こし

二月朔日 一香のもの一重 六小松崎

二日 一引わり麥并香のもの一重 新家

五日 一酒一斤 川上蔵

同日 一かるやき井ごぼう一重 豊田又

七日 一酒一斤肴一器 岡本平

八日 一かん徳利小皿 鴨志田

九日 一ふなこんぶ 岡本平

同日 一すし 鱸氏

十日 一雁肉 楊子長

十一日 一酒一斤すし 郡司孝

十二日 一雞卵一箱 西恒彦

十三日 一猪口 岡本平

同日 一酒一斤 深澤甚

十五日 一だんご二器 大金平

十六日 一鳥一なべ 楊玄

十七日 一まぐろ香のもの 四小柳津太郎

十六日 一まぐろみそづけとうがらし九 大關元

十七日 一なまこ 西の新

十九日 一まぐろさしみ 岡本平

同日 一ひらめさば 東國や

同日 一酒一斤 久保林

廿一日 一すし一重 山田龍之助

同日 一菜ひたし 富田六

廿一日 一夕飯四五人前 鱸

是る小梅 廿八

廿二日

朝飯

所

同日

一香之もの

忠介

同日

一あむつ一斤

江幡

廿五日

一酒一斤坐禪豆たにし

同人

廿八日

一酒一斤まぐろさしみ

同人

一香之もの

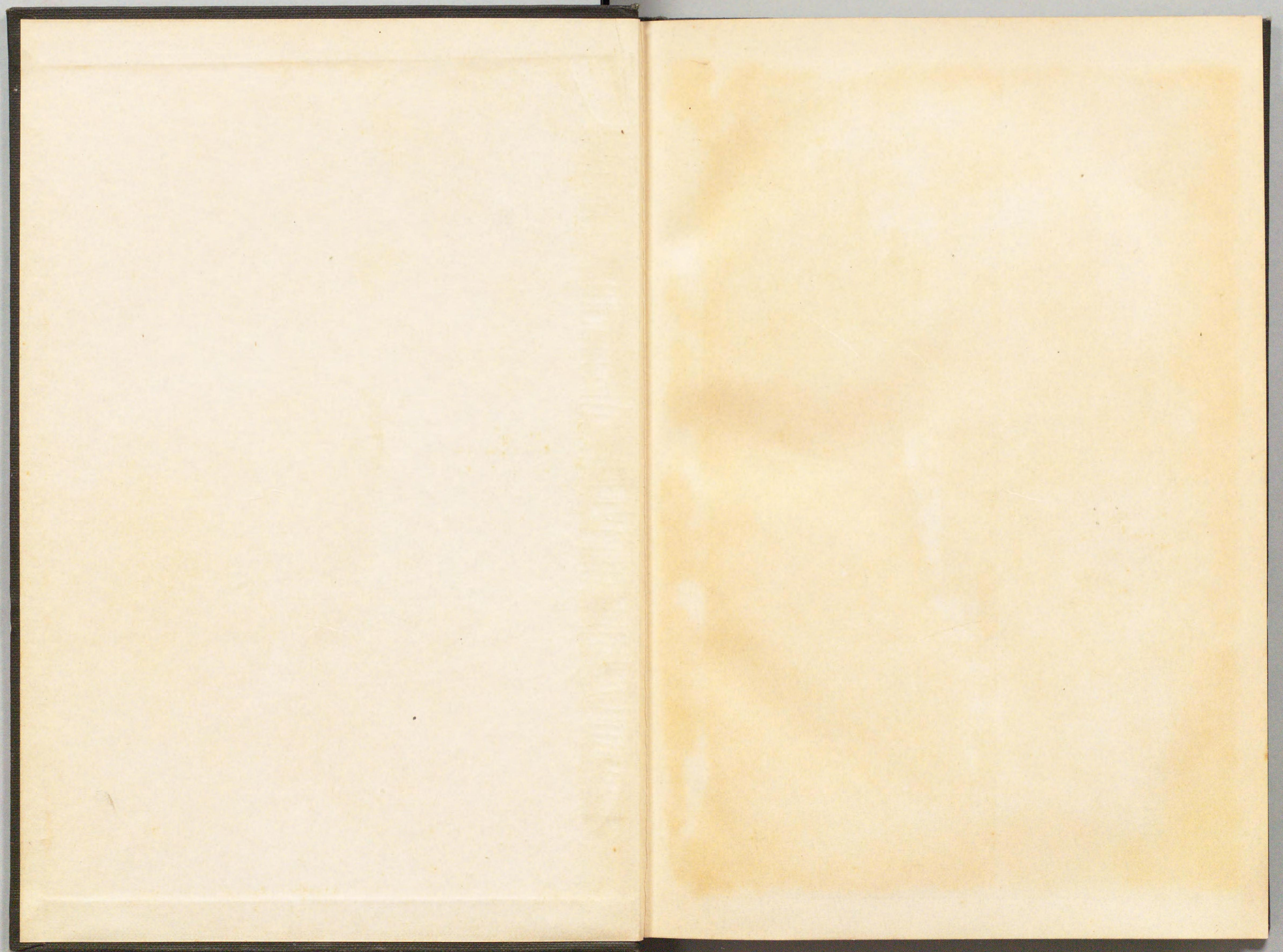
忠介

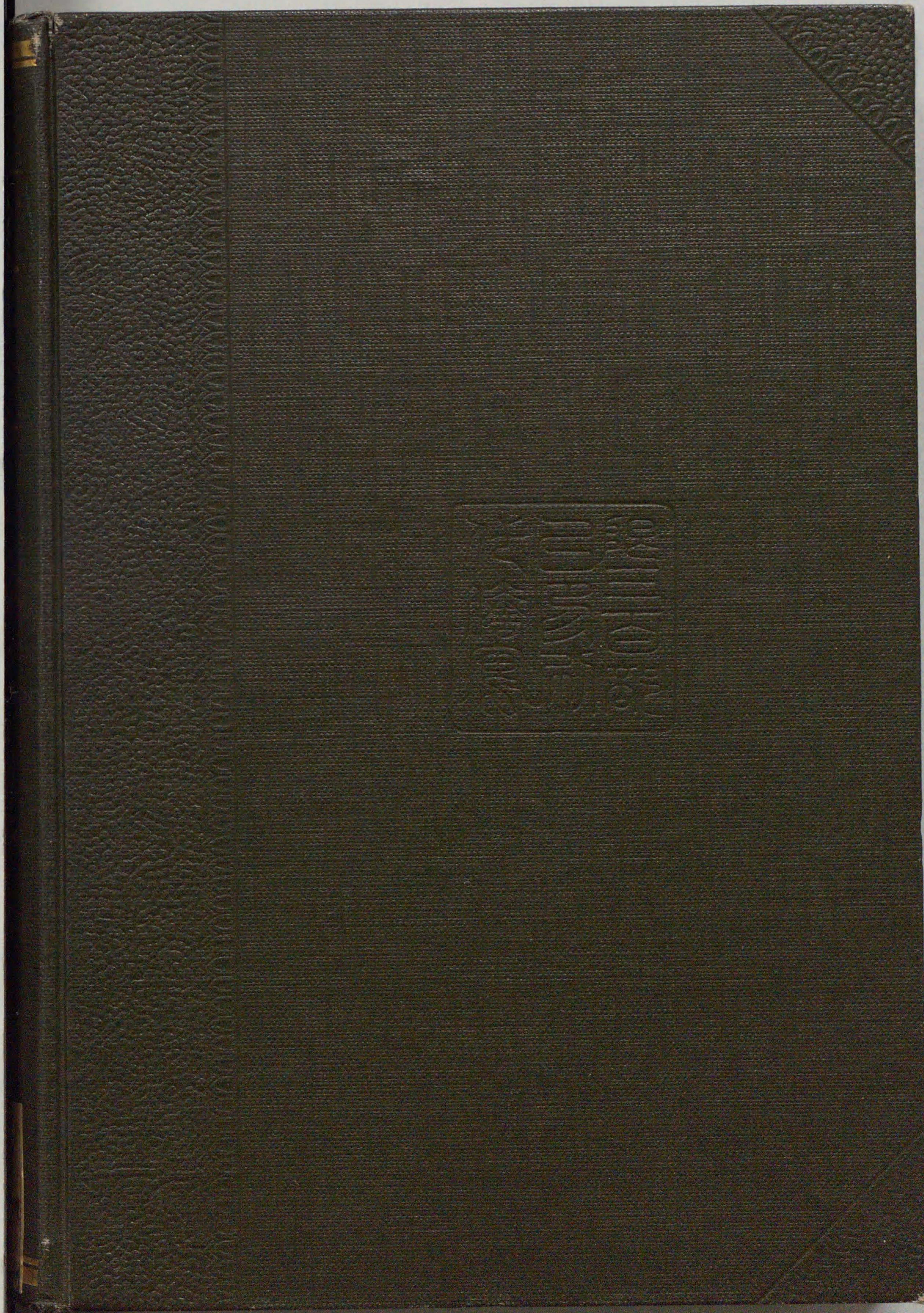
三月二日

一香之もの

忠介

震 巽





OXFORD
UNIVERSITY PRESS
NEW YORK